

『悩まない心をつくる人生講義』  
イズムの教えを現代に活かす』を読む

タオ

谷中 信一



四六判 256頁  
日本僑報社  
[本体1900円+税]

チーグアン・ジャオ著／町田晶詠  
悩まない心をつくる人生講義  
タオイズムの教えを現代に活かす

本書の英文版タイトル『Do Nothing & Do Everything』では何のことかわからないが、中文版タイトル『無為而無不為』から、本書が老子の中心思想に因んで付けられていることが分かる。しかし、最もわかりにくいのは日本語版タイトルである。しかし、内容を読んで最も納得のいくタイトルとしては日本語版のそれだと言えるだろう。中文版タイトルでは、『老子』の思想が解説されていると勘違いしてしまうだろうし、英文版タイトルでは何を言っているのかわからず混乱してしまいそうだからである。

著者は、中国人で漢字で書けば趙啓光であるが、本書表紙にチーグアン・ジャオとあるので、本稿ではチー氏と呼ぶことにする。チー氏は一九四八年、中国北京生まれ。両親ともに物理学の教授であった。文化大革命期に苛酷な青春時代を

送った。その後米国に渡り、比較文学研究で博士号を取得後そのまま定住、ミネソタ州にある私立名門大学カールトンカレッジで、主に中国語、中国文化、比較文学などを教えていた。そこに見られるのは型どおりの『老子』解釈ではなく、中国人として生まれ育った中で育まれたメンタリティーと感性をもとに彼なりに獲得した、いわば体験的『老子』である。ところがそのタオイストを自称してなされた講義は、学生の共感を呼び大変評判になった。これが本書が生まれる機縁となった。

従って、彼は『老子』の研究者でもなければ、学生に中国古典としての『老子』を講じていたのではないにもかかわらず、『老子』中の最も有名な一節「無為而無為（無為にして為さざるは無し）」を採って本書は名付けられた。

やがてこれが中国に里帰りして、先に紹介したタイトルで出版され、そして日本でも町田晶さんの手で翻訳されて二〇年来に亘り日中文化交流事業を手がけている日本橋報社から世に出た。町田さんは東北大学大学院で中国思想史を専攻された気鋭の翻訳家である。

さてここまで書いてくると、当然思い起こされるのは、わが国でも英文学者として長年大学で教鞭を執ってきた加島祥造氏がやはり『老子』について語りそしてそれが大変な評判を呼んだことである。彼も立て続けに『老子』本を出版し、一般読者に向けて自己流の『老子』解釈を展開した。その時、彼もタオイストを自称していた。

評者は、かつてこの加島氏の『老子』本に注目し、「現代日本における『老子』の受容——加島祥造の著作を中心に」と題して小文を発表したことがある（日本女子大学日本文学科誌『國文自白』第五一号 二〇一二年）。本書を手にとって、真っ先に思い出したのが加島氏のことであった。

相前後して、日本とアメリカで、『老子』本がタオイストを自称する大学教授によって発表されたことは注目してよいだろう。評者は中国思想史研究を方法論に『老子』を研究しているの、彼らの『老子』解釈に異論がないわけではないが、むしろ自由自在な老子解釈にかえって新鮮な読後感を得

ることができた。

もともと、『老子』は二千年以上も前から思い思いの解釈を許容している不思議な文献である。ある時は処世哲学の書として、またある時は政治哲学の書として、またある時は宗教学の書として読まれて来た。それは『老子』には固有名詞が何一つ登場せず、すべてが抽象的で、しかも断片的な論説で終始しているからである。しかもそこに宇宙論や生成論と言った一筋縄ではないかな哲学が同時に語られていることが、『老子』の難解さとなり、それがまた得も言われぬ魅力となつて、さまざまな解釈が生まれてくる。中国古典でも他に類例を見ない。

加島氏が言っていることであるが、英訳された『老子』は優に五〇種を超え、あるドイツ人は『老子』を翻訳した後で、自分には『老子』を誤解する権利があると言つたというのも、思えばもつともなことである（同氏著『伊那谷の老子』淡交社一九九五年）。

さて加島氏は、還暦を過ぎて『老子』の魅力の虜になつた。そして、長年研究の対象としてきた西洋文学と訣別し東洋の古典に回帰したのであった。そればかりではない、長年住み慣れた都会を捨てて、独り田園に隠棲したのである。彼は、そうした生き方を『老子』から学びまさにそれを実践し

た。心の安静を得るために。そこで彼が辿り着いたのは「求めない」という境地であった。この境地は程なくして同名の詩集として刊行され、ベストセラーになった（『求めない』小学館 二〇〇七年）。まさに彼にとつては人生の終着点に『老子』があった、と言える。そして、それが思いがけないことに若い読者の共感を呼んだのである。彼らも、加島の著作を読みながら心の安静安心を得たのであろう。

さて、一方のチー氏である。本書第一章の現代タオイスト宣言には、彼の老子観が端的に表明されている。彼は言う、無理に何かをしない無為とすべてを為す無不為。これこそ現代人が生活上のいろいろな問題に対して取るべき態度……。無為とは自然や宇宙の法則に従うこと……。無為を習慣にすれば、人生は思わぬ奇跡を返してくれる。……無不為とは、良い習慣を身に付ける創造的な行為……。無為とは謙遜……。無不為とはさまざまな法則の中を自由に進む勇氣……。無為とはすべてがうまくまわっていることを知る喜び……。無為とは無駄がないこととであり、無不為には欠かせないもの……。あまり重要でないことはやり過ごし、大事なことに集中する。……無為は元気の秘訣……。夜空で無心に輝く星々のように、人のことはかり気にせず、人の不幸を喜ばず、人の成功

に嫉妬せず、人との格差に怒らない……。はるかかなたの星々が頭上に静かに輝くのも、地球が二十四時間で一回転するのも、みな皆無為無不為のあらわれだから。宇宙がそうなのだから人も同じだ。我々は、何の迷いもなく無不為を実現する方法を知っている。（一五―一八頁）

ところで英文版タイトルが「Do Nothing & Do Everything」であったことは既に紹介した。もちろんこれが「無為而無不為」の英訳なのだが、この「而」を「&」に置き換えたところに、チー氏独自の解釈が見られる。

従来われわれは、「而」を接続詞には違いないが、「それにもかかわらず」「それでいながら」というようなある意味では逆説的な因果関係で「無為」と「無不為」を繋ぐ接続詞として読んできた。つまり、「(道は) 何もしない、それでいてすべてを成し遂げてしまふ」(第三十七章にこの用例がある)ということである。その意味では「無為」とは文字通り何もしないのではなく、ことさらなことをしないということであり、この場合「ことさら」とはある特定の意図や目的を意味する。何事か成し遂げようとすると、とかくもくろみ通りにいかなることが多いことはしばしば経験する。ところが春夏秋冬の四季の循環、日月の交代、天体の運行など、自然現象は皆特定の意図や目的を持って営まれているわけではないのに、何

一つ支障なく推移し万事が見事に完遂される。だからわれわれはこれを「自然」と呼んでいる。つまり「無為」であるのに或いは「無為」であることによって、すべてのことを成し遂げてしまふ、或いは成し遂げられてしまふという意味である、そうするとこれを英訳するならば「Do nothing but Do Everything」の方がむしろふさわしいのではないかと思える。

ところがこれをチー氏は

中国語の「而」というのは「しかし」あるいは「しかも」という意味だが、「その結果」という意味ではない。つ

まり「無為」と「不無為」のあいだに因果関係はない。……「無為」と「不無為」をともに実践する、みずから

の人生の主体となるのだ。道は「無為」と「不無為」のあいだにある。「無為」を通して「無不為」を実現しよう。

(四三〜四四頁)

と言う。つまり、「何もしない、そしてすべてをやり返げる」というもので、これは一言で言えば「無為を為す」ということだ。例えば「深い睡眠、深い無為は、ストレスや焦りによって緊張した神経系をリセットする。睡眠は一番の無為の実践だ」(九三頁)、「おだやかで楽しい気分というのは無為のように見えるが、それによって発信される信号は全身を活発な状態『無不為』にする」(八一頁)と言うとき、結局彼も「無為」

と「無不為」を因果関係で結んでいるとは言えまいか。そして次のように言うとき、もはや老子の無為の思想からは離れてしまふ。「食は生死の奇跡のもとだ。飢えと暴飲暴食のあいだに適量を見つけ、無為と無不為のあいだでうまくバランスを取ろう」(八五頁)。

これでは、「無為」ではなく「中庸」の勧めかとも錯覚してしまふ。しかしそのようなことはさして問題にはなるまい。老子は誰もが「誤解する権利を持つ」のだから。

要するにチー氏が言いたかったことはこういうことであろう。人はだれでも自分の能力を過信して性急に人生の成功を求め、このためにあれこれと思い悩む。成功を確信してやったことがかえって裏目に出ることだって少なくない。よかれと思ってやったことが失敗に終わった経験をどれほどしてきたことか。それが新たな悩みとなつて己を苦しめる。悩みが悩みを呼び、ストレスがまた新たなストレスを生む。全く悪循環だ。しかもこの負のスパイラルに一旦落ち込んでしまふと、なかなか脱け出せない。思い切つて心の持ち方を変えなければならぬ。そこで登場したのがタイオイズムなのだ。野心に溢れるがゆえにまた悩みも多い学生達は、こうした『老子』の思いもよらない新鮮な発想に共感したに違いない。彼は次のようにも言う「無為は自由を得た魂の飛翔だ。自由を得た

者は日常的な自我による束縛を離れ、ものごとを全体として体験する」と(二六九頁)。まさしくこれこそ彼らにとって大きなカルチャーショックとして受けとめられたことだろう。

物質的な楽しみや社会的な評価は外から来るものだが、幸福は内面的なものである。内面的な幸福はうすつぺらな楽しみをはるかに超える。内面的な幸福には、自分を日常的な悩みから解放するための静かなひとりの時が必要だ。生きる上で悩むことは大事なことだ。しかしそれは一時的でなければいけない。……おだやかな心は知を高め、心を広くし、健康にもよい。静かな幸せは人を強くし、世の中に貢献する力を与えてくれる。(二二二頁)

これがチー氏が最も言いたかったことではなからうか。……／ぼくが「求めない」というのは／求めないですむことは求めないってことなんだ。／すると／体のなかにある命が動きだす。／それは喜びにつながっている。

求めない——／すると／心が静かになる  
求めない——／すると／楽な呼吸になるよ  
求めない——／すると／体ばかりか心も／ゆったりしてくる

求めない——／すると／心が広くなる

……

求めない——／ということとは／なにもしないことではないよ／求めないことで／かえって自分の／内なる力を汲みだすんだ。／自分のなかの／眠っていた力を呼びさますんだ。

こちらは先に紹介した加島祥造氏の詩集『求めない』の一節である。

老子を通じて二人が到達した地点があまりにも共通していることに驚く。改めて『老子』という古典の持つ偉大な魅力とその思想としての生命力の大きさに感服する。

(やなか・しんいち 日本女子大学)